

今日も私はこのコとエッチな事をする。

大の大人がこんな事をするのは間違っているとは思うけれど、
大好きなあの人の子供の頃に似ているこのコを前にして理性なんて保てない。

「ねえ？お姉ちゃんがこんなにご奉仕してあげてるのに今日はまだ大きくならないの？」

「うんごめんさい。あつ、あんまり強く握らないで……」

「えっ？Sも通り優しくこきこきしてるだけだよ？君が敏感なだけ」

「……」

「あーっ、やっつと大きくなってきたよ」

「あーっ、お姉ちゃんのヨダレが僕の口にいっぱい入ってきて苦しS...」

「そんな事言ってもやめてあげないよ、今日もたくさんペロチュウしながらエツチな事たくさんするのよ」

「...」



「あゝやつと我慢汁出てきた♪あとらつともみたらいに鼻息も荒くなってきた♪
らぶらぶ♪ そろそろ挿入の準備を始めるっ♪」

「え、あれまた出るの？ や、やだ・・・あれ出る時、僕おかしくなるんだもん・・・」

「だーめ♪今日も挿入の準備をするの♪」

「それに前、白いのが出るのは男のコだからしょうがないって教えたよね？
「なんでも怖くないんだよ！」

このコに初射精させたのは私。あの時の底知れない優越感、征服感ときたら、何ものにも変え難い体験だった。
はあ、今思い出してもゾクゾクする♪

『おっ、田ちゃん。。。。』

「いふふ♪ 今日もお姉ちゃんとエッチなペロチュウしながら白乳のSSOぱら出そうね♪」

このコはいつも射精する時、目を瞑りその細い体を小刻みに震わせながら、私に申し訳なそうな顔をする。私はそのかわいい顔を見る度、もっともっとエッチな事をしてあげたくなる♪



少し休憩した後、今度は口でたっぷりしゃぶってあげる♪
フェラをしはじめた頃は

「そんな汚いところ舐めちゃだめだよっ！」

と顔を真っ赤にして怒っていたけれど、今はこの通り。

オチン○ンの先っぽが気持ちいいらしいので、

飴玉を舐めるように、口の中で転がしながらしゃぶってあげる♪

「先っぽだけチロチロ気持ちいい？」

っ
っ
っ

「いっしょに君の本当にかわらねっ」



「あああっ！お姉ちゃんの喉に当たってる……」

「はぁ♡」

「はぁ♡」

「はぁ♡」

「はぁ♡」

「はぁ♡」
「ひみのなはく、ひみのほひんひん、ひひひひくふほひ」
「(回の中で、君のおちん○ん♪クビク〜♪であるよ〜)」

「たまたに根元まで啜えこんであげる。」

「あまり激しく口を動かすとすぐに射精してしまうので、いい具合にしゃぶってあげる。」

「いちいち反応がかわいい♪」

「お姉ちゃん、お姉ちゃん、お姉ちゃん……」

「お姉ちゃん、お姉ちゃん、お姉ちゃん……」

「君の精液全部飲んであげるよ」

「お姉ちゃん、お姉ちゃん……」

「お姉ちゃん、お姉ちゃん……」



この日はあれで終わらそうと思っていたけれど、私の性的衝動に歯止めが効かなくなっていた。
少し休憩させ、本日三度目のシヨタチ○ポいじり

「お姉ちゃん、今日はもつと君の精液飲みたい♪さつきみたいなおいしいのたくさん出して♪」

「お、お姉ちゃん、今日はなんかおかしらよ……」

「そんな事言つたつて無駄♪君の顔にもつと僕のおちん○ん弄ってほしいって書いてあるよ♪」

「ぞ、そんなこと……」

さすがに三回目となると、私がエッチな顔でおちん○んを握っただけでギンギンに勃起させていた。
嫌がつてる素振りを一応見せるけれど、その表情はどこか嬉しそうだった。

はぁ♡

ニク

ニク

はぁ♡

「ぞ、そんなに激しくしちゃ……」

「だって全然白いのよいいならんだもん。はやくお姉ちゃんの口にしたくさん口づいて」

「ははは」

「ははは」

「ははは」

「ははは」



「……」

「あー ああー」

「あつ♪ やつと白いの出てきた♪ でもお姉ちゃんのエツチな顔を見てたらもつと出るはず♪
ほらほら♪ まだまだ出るでしょ?」



あつ

あー

あー

あー

あー

「うふふ、見て見て、お姉ちゃんの口の中が君の濃くて熱いザーメンでSOSのSがゼーンぶ飲んであげるからね」

「お姉ちゃん、回の中だけじゃなくて……体中に白いのが……ごめんなさい……」
「あやまらなくていいんだよ、よく頑張ったね、えらいえらい」

私が精液まみれになった姿を見て興奮したのか、射精したばかりのおちん○んがまた勃起を始めていた。

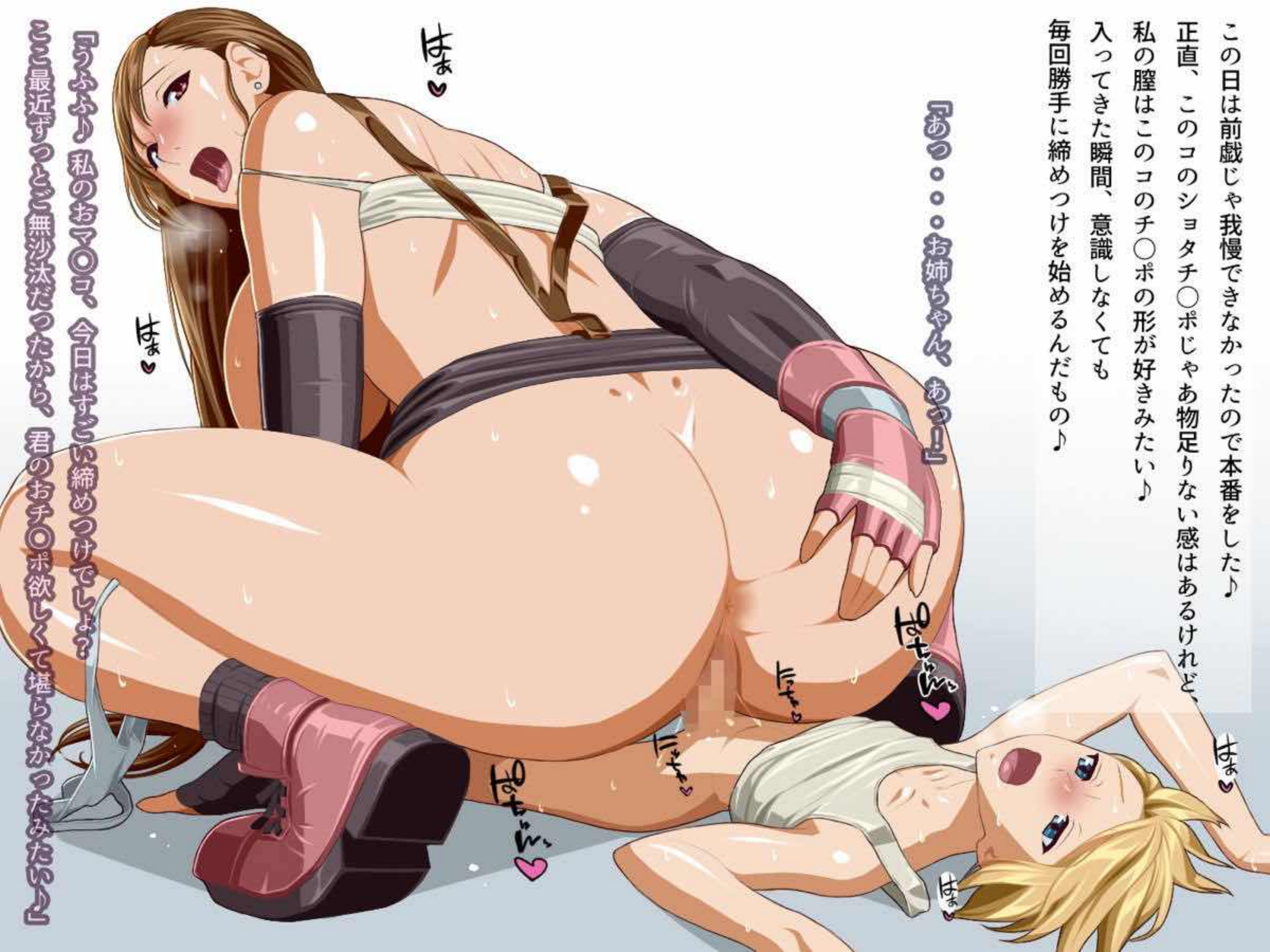
はぁ♡

アロキ...

はぁ♡

この日は前戯じゃ我慢できなかったなので本番をした♪
正直、このコのシヨタチ○ポじゃあ物足りない感はあるけれど、
私の膣はこのコのチ○ポの形が好きみたい♪
入ってきた瞬間、意識しなくても
毎回勝手に締めつけを始めるんだもの♪

「あっ。。。お姉ちゃん、あっ！」



「いっふふ♪私のおマ○コ、今日はすっごく締めつけでしょ？
ここ最近ずっつと無沙汰だったから、君のおチ○ポ欲しくて堪らなかつたみたい♪」

「あっ」

「あっ」

「あっ」

「あっ」

「あっ」

「あっ」

「あっ」

「あっ」

「あんのっ、当たってるっ」

「お、お姉ちゃん！」

「ののままだと僕もう出ちゃうー」

はま♡♡

はま♡♡

「うふふっ、今日は中に出して大丈夫だよっ」

はま♡

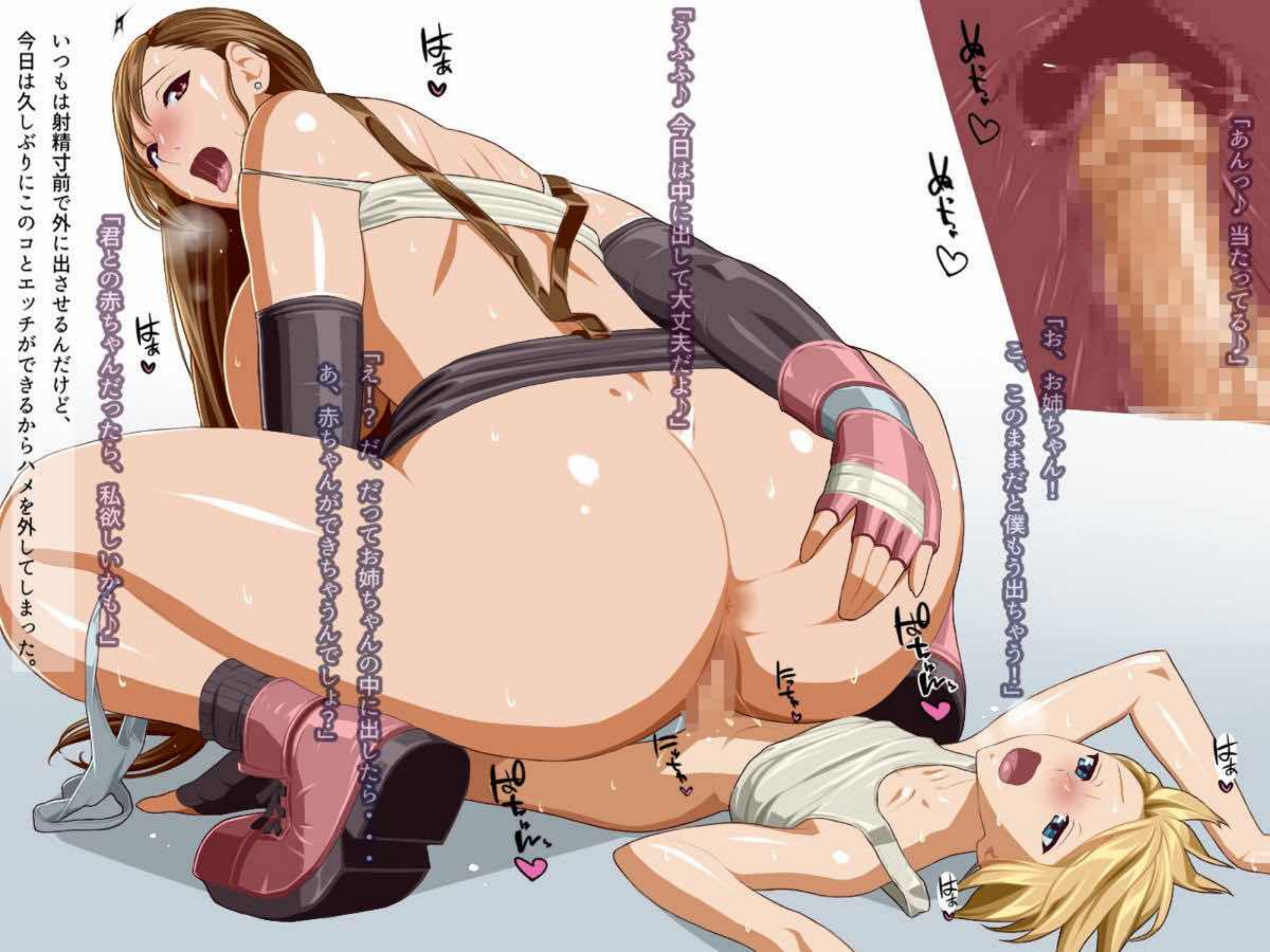
「えー!? だ、だっってお姉ちゃんの中に出したら...
あ、赤ちゃんができちゃうんでしょっ!」

「君との赤ちゃんだったら、私欲しいかもっ」

はま♡

いつもは射精寸前で外に出させるんだけど、

今日は久しぶりにこのコとエッチができるからハメを外してしまった。



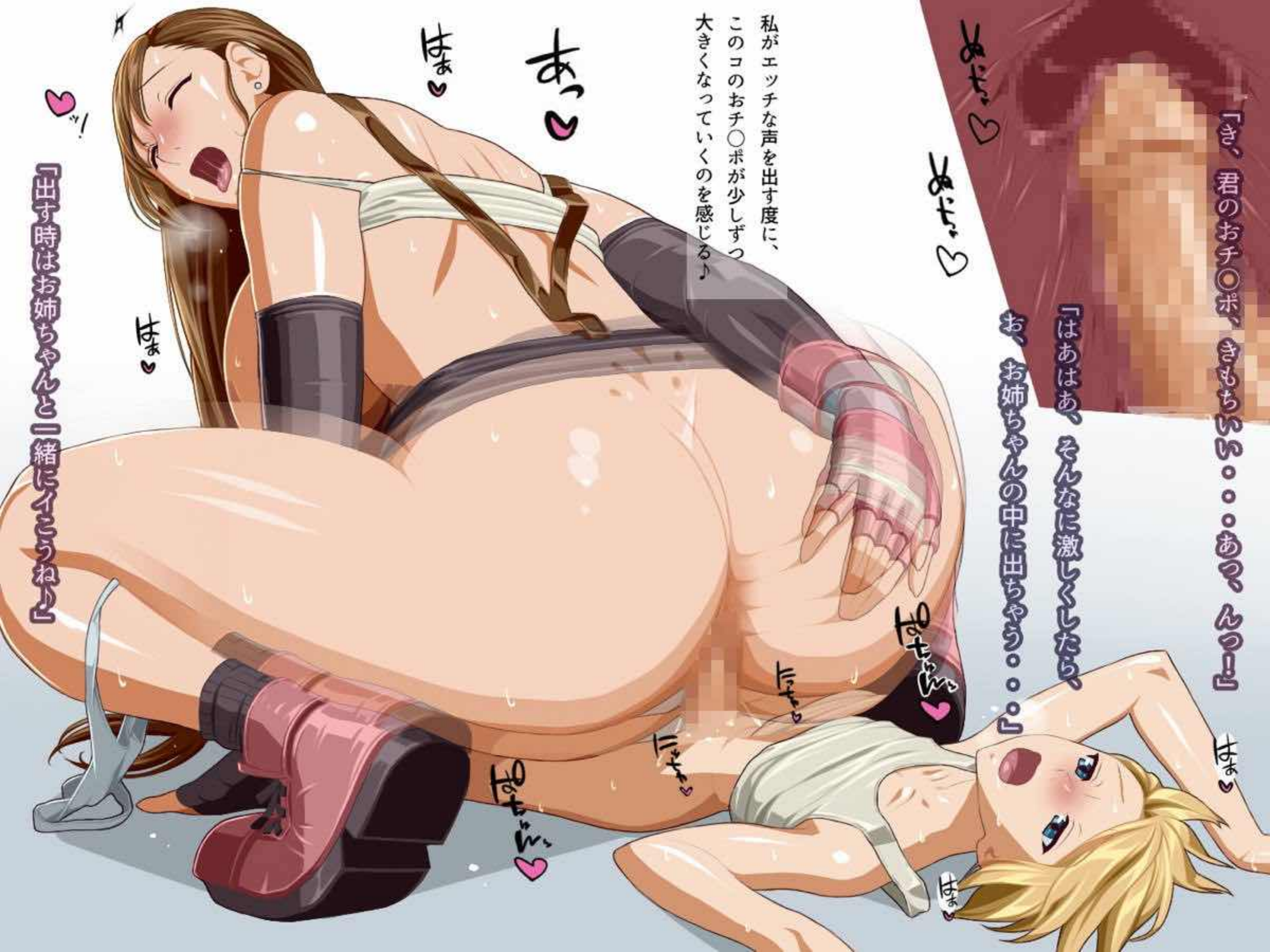
「き、君のおち○ポ、きもちSSS。。。あゝ、200~」

「はあはあ、そんなに激しくしたら、

お、お姉ちゃんの中に落ちちゃう。。。」

私がエッチな声を出す度に、
このコのおち○ポが少しずつ
大きくなっていくのを感じる♪

「出す時はお姉ちゃんと一緒にイこうね♪」



あゝ♡

あゝ♡

あゝ♡

あゝ♡

あゝ♡

♡

あゝ♡

あゝ♡

あゝ♡

あゝ♡

あゝ♡

あゝ♡



ムゲキアッ

「ポコポコ」



「ポコ」

「あーん」

「ポコ」

「ポコ」

「ポコ」

「ポコ」

「ポコ」

「ポコ」

シヨタチのポでいつちやう!

いつちやうのおー!」



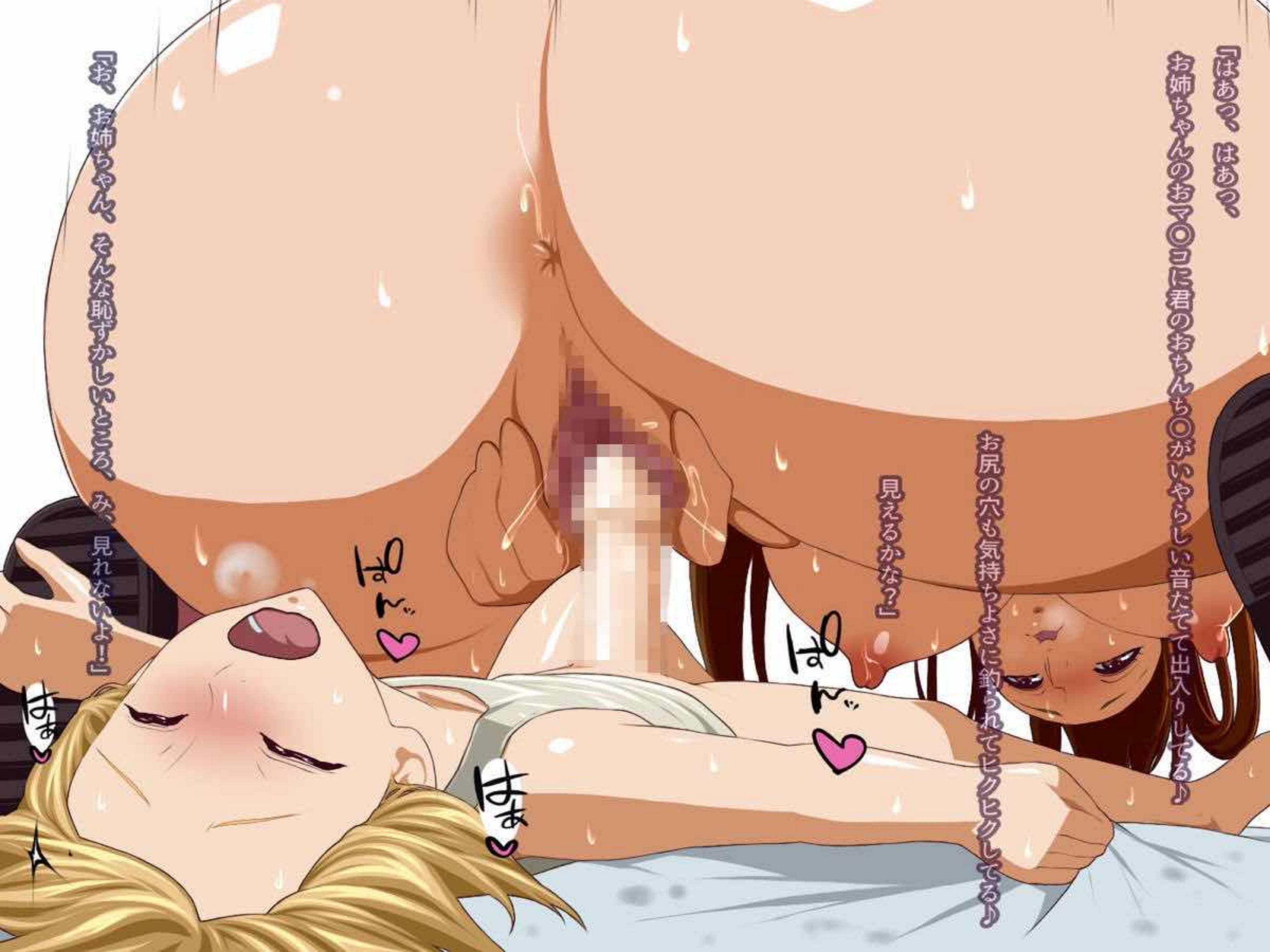
「はあっ、はあっ」

お姉ちゃんのおマ○ロに君のおちんち○がいやらしい音たでて出入りしてる♪

お尻の穴も気持ちよさに釣られてムンムンしてる♪

「見えるかな？」

「お、お姉ちゃん、そんな恥ずかしいところ、み、見れないよ!」



ぽっ♡

ぽっ♡

ぽっ♡

ぽっ♡

「見てくれないなら激しくしちゃうっ」と」

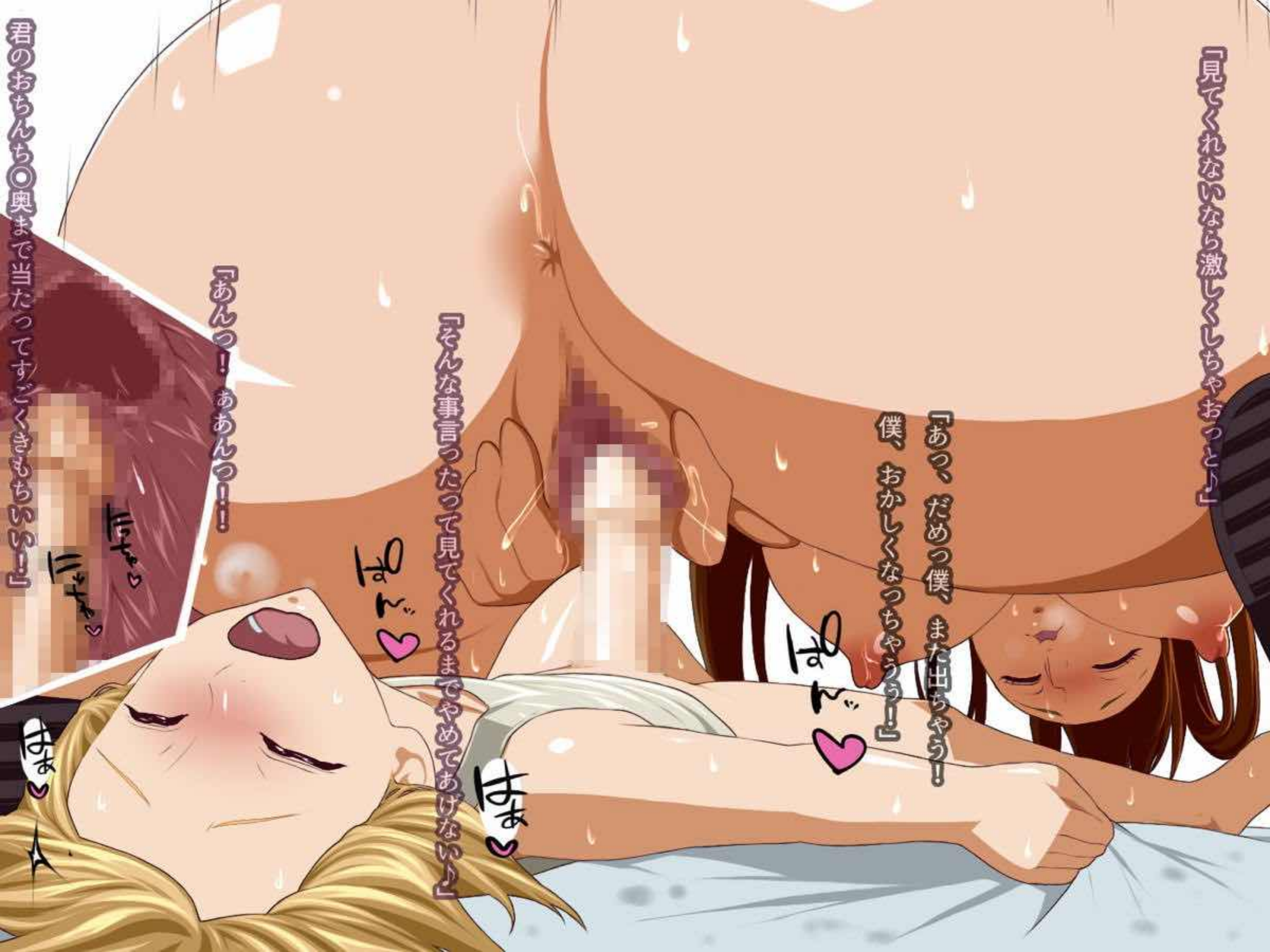
「あつ、だめっ僕、また出ちゃう！」

僕、おかしくなっちゃうっ！」

「そんな事言っただけで見てくれるまでやめてあげなっ！」

「あんっ！ ああんっ！！」

君のおちんち○奥まで当たってますっ！きもちSSSっ！



「ああっ！ また出ちやう！」

「お姉ちゃんの大きなお尻にたくさん出してっ」

「アハハハ」

「あっ！ あんっ！」

「アハハハ」

「あっ！」

「あっ！」

「アハハハ」

「アハハハ」



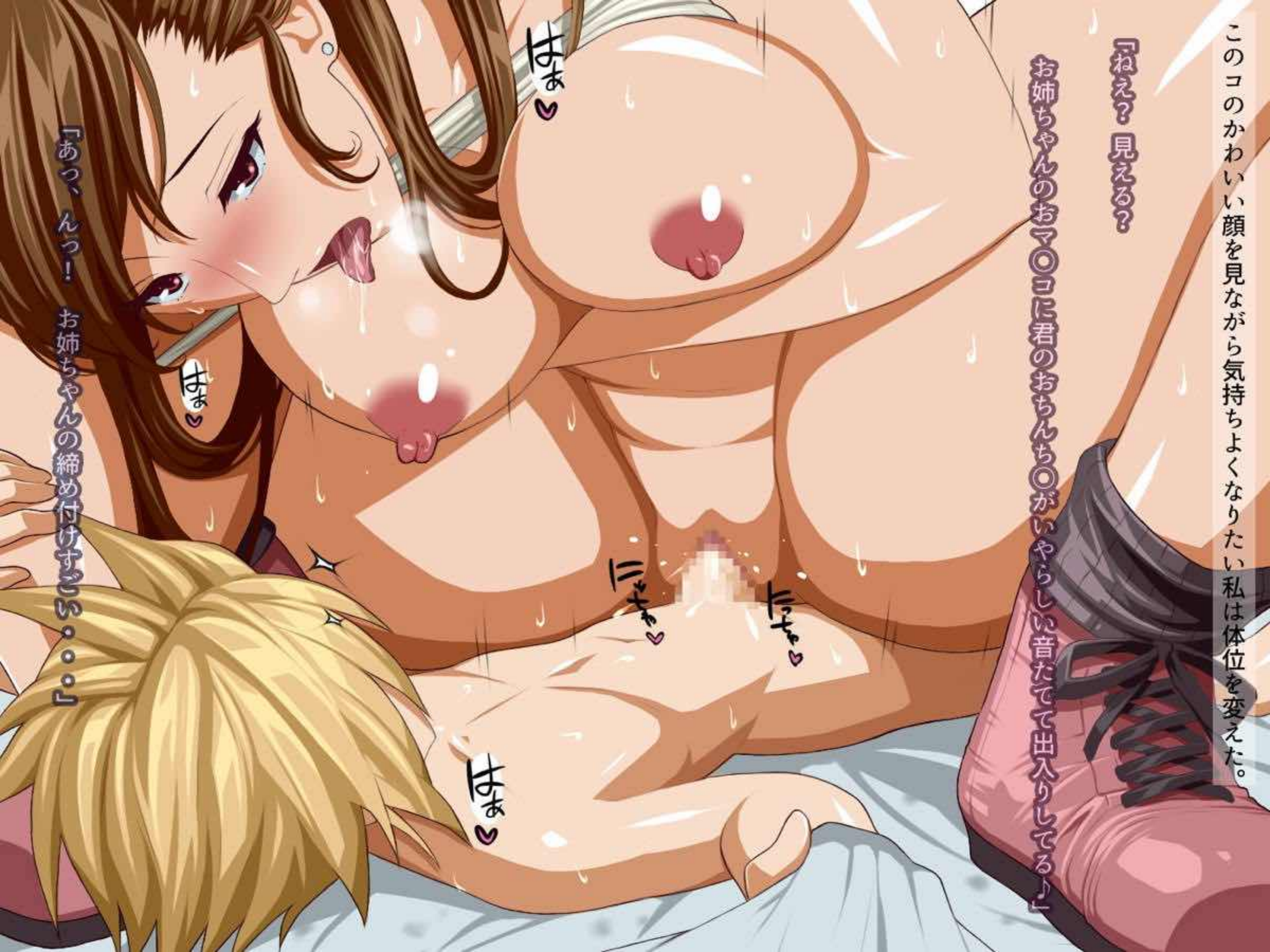
このコのかわいい顔を見ながら気持ちよくなりたいたい私は体位を変えた。

「ねえ？ 見える？」

お姉ちゃんのおマ○コに君のおちんち○がいやらしい音たてて出入りしてる♪」

「あっ、んっ！」

お姉ちゃんの締め付けます。。。」

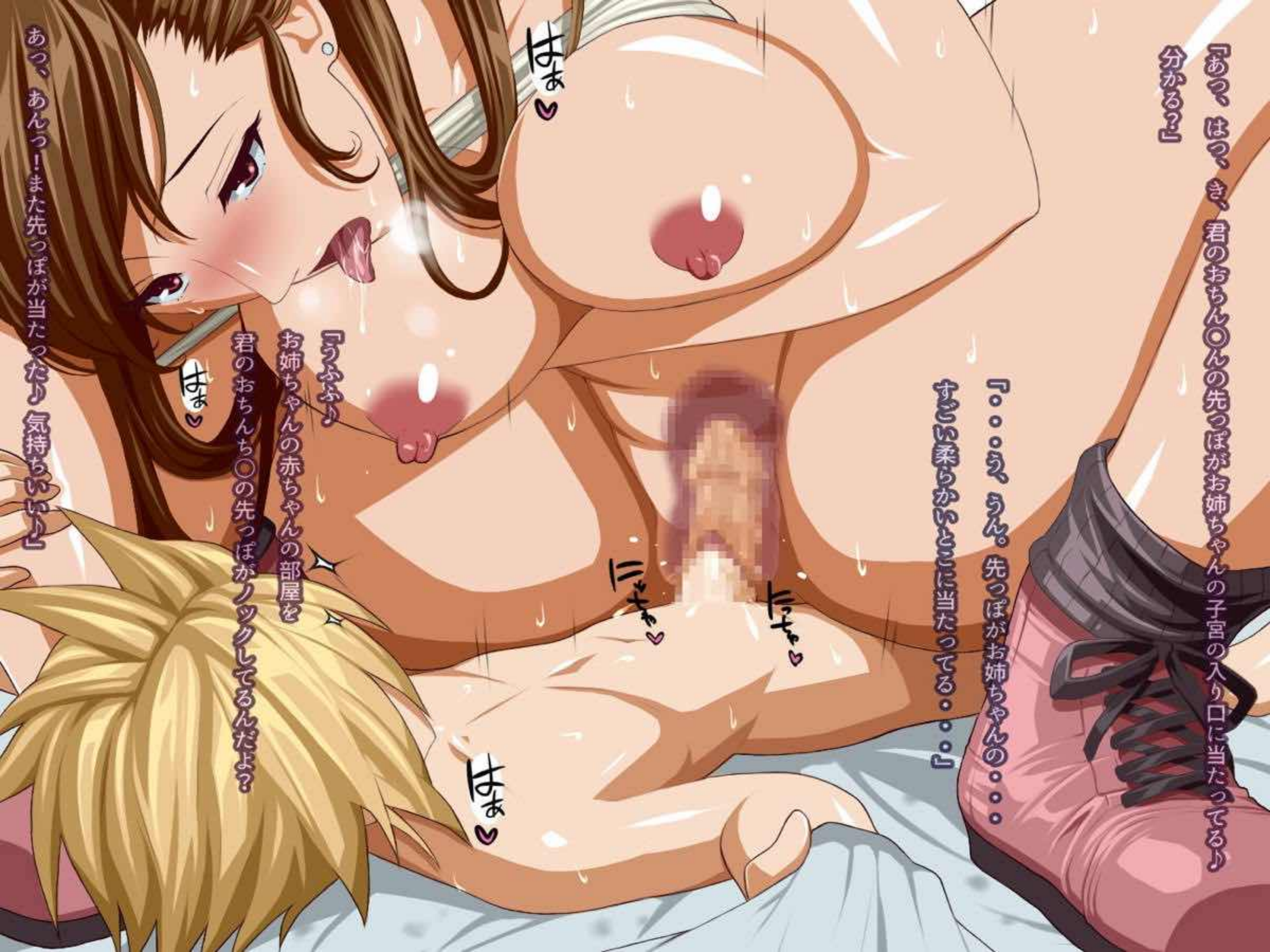


「あつ、はっ、き、君のおちん○んの先っぽがお姉ちゃんの子宮の入り口に当たってる♪
分かる?」

「。。。うん。先っぽがお姉ちゃんの。。。
すっごく柔らかからとんじに当たってる。。。」

「うふふ、
お姉ちゃんの赤ちゃんの部屋を
君のおちんち○の先っぽがノックしてるんだよ?」

「あつ、あんっ!また先っぽが当たった♪気持ちいい♪」



「はあっ！ あっ！ 君のおちんちんが気持ちいい！ 気持ちいいよおー！」

「お、お姉ちゃんの締め付けすっ……
僕もいきそう……」

「イク時は一緒に顔見ながらイこうねっ」

「んっ……あーっ！」





「あ、はっ、あんっ！あんっ！！」

「はっ、はっ」

「はっ、はっ」

「はっ、はっ」

「はっ、はっ」

「はっ、はっ」

「はっ、はっ」

「はっ、はっ」

「はっ、はっ」

この前のセックスが気持ちよかったのか、
今日はこのコから呼び出され、このコの家でエッチな事をたくさんする♪

「今日はいつもよりおちん○んギンギンだね♪
あつ、うふふ♪今、赤ちゃんの部屋に当たった♪」

はま♡

「。。。お姉ちゃん、今日は。。。なんだか。。。
そ、そのエッチな匂いがする。。。」

はま♡

はま♡

「うふふ♪朝、トレーニングしてきたから、
その時掻いた汗の匂いかな？」

。。。あつ、あんっ！また当たった♪」

はま♡

「。。。omg。。。はあはあ」
SRRS。。。はあはあ」

私の体の匂い、汗の中に混じっている発情した男の子にしか分からない♪
とってもエッチなフェロモンの匂いを嗅いで、
このコのおちんち○がいつも以上に大きくギンギンになっている♪





「尿#SSSS」

「あ」

「あ」

「あ」

「うふふ、君のおちんち○、私のおマ○ロの中で脈打ってるよ、あ、あ、あ」

「うん……お姉ちゃんの中暖かくて気持ちSSSS」

「あ」

あははは

「お姉ちゃんのおっぱい……先のぼが柔らかくておっぱい……」

「おっぱい、おっぱい、おっぱい……あーっ……あーっ……」

あはは

「お姉ちゃんの乳首、僕が舐める度に膨らんでっ……えっ……」



「うふふ、お姉ちゃんの体、好き？」

「おっぱい、おっぱい、おっぱい……」

あはは

「……んんん……」

「おっぱい、君の好きなおっぱい……」



あはは

あはは

「はあっ！ あっ！ あんっ！」

「君のおちんち○気持ちSSー奥まで気持ちSSー」

「はあはあっ、お、お姉ちゃんの奥の柔らかいところに僕の先っぽが当たる度に
お姉ちゃんのアソコがきゅってなる。。。まっ
気持ちよすぎてもっ白○の出ちゃSSー。。。」

「ま、また「一緒にイこうね！」

あはっ
あはっ

あはっ
あはっ

あはっ
あはっ

あはっ
あはっ



「あーあーあー」

「あー！はあー！」

お姉ちゃんの赤ちゃんの部屋に

君の濃さザーONのSOS

アハハ

アハハ

アハハ

アハハ

アハハ

アハハ

アハハ



私のエッチな体を覚えてしまったこのコは、
私とセックスをしたいがために昼夜問わずお店に来るようになってしまった。
今日はこれで3回目。

「……お姉ちゃん、ごめんなさる……」

「しょうがないなあ、はやく出すんだよ？」

「お店に戻らないといけなから……」

「あー、ごー」

「あー」

「……うん、でも一回出すだけで足らないかも……」

「なんかね、この頃お姉ちゃんの事考えるだけでおちんち○がどんどん大きくなって苦しいんだ。
自分じゃどうしようもないんだ。」

「しかも今までは一回出すだけでおちんち○が小さくなっていたんだけど……
もうそれだけじゃダメみたい……」

「うふふ、お姉ちゃんがめっちゃくちやになるまでしないと気が済まない？」

「……うん。」



「はあ、すいすい。あー奥まで当たってるー」

「はあはあ、お姉ちゃんのアソコ気持ちいい。。。あつたかくて、ぬるぬるして。。。」

「はあ」

「はあ」

「はあ」
「はあ」

「お、お姉ちゃん今日はもう二回目だから少し疲れてきたみたい。。。君の気持ちは分かるけど優しくしてね。。。あんっ！」

「いめんなさい。。。頭では分かっているんだけど、

お姉ちゃんの体エッチで気持ちいいから腰が勝手に動いちゃう。。。」

Artist's signature

「はあ、すんすん。あー奥まで当たってるー」

「はあはあ、お姉ちゃんのアソコ気持ちいい。。。あつたかくて、ぬるぬるして。。。」

「お、お姉ちゃん今日はもう二回目だから少し疲れてきたみたい。。。君の気持ちは分かるけど優しくしてね。。。あんっ」

「はあ」

「はあ」

「はあ」
「はあ」

「うめんなさ。。。頭では分かってるんだけど、お姉ちゃんの体エッチで気持ちいいから腰が勝手に動いちゃう。。。」

さすがに本日3回目となると、正気を保つだけで精一杯だった。だって何回も子宮の入り口の一番気持ちいい所を的確に突いてくるし、私の膣はこのコのおちんち○が大好きだから私の意志とは関係なく締め付けを始めるんだもの。

Artist
Artist

「お姉ちゃんのその顔好き。」

「お店にいる時は綺麗でかっこいいお姉ちゃんが、
今は僕のおちんち○で気持ちよくなって泣きそうになっているんだもん。」

「ねえお姉ちゃん、僕お姉ちゃんを喜ばせるためにたくさん勉強したんだ。」

「気持ちいいかな？ねえっ♡♡♡」

私は子宮を突かれるたびに体中に走る快感のせいで、
このコの問いかけに相槌を打つことしかできなくなっていた。



「うんっ！お姉ちゃんの中にまた出すね！」

「うんっ！たくさんお姉ちゃん部屋の赤ちゃん部屋に出して！」

「あーあーあーあー」



もう完全に主導権を失った私はされるがまま。

お店の裏の倉庫で、恥ずかしい格好のまま何度もこのコにハメられまくる。

「はあはあ、お姉ちゃんの体は僕よりも何倍も大きいし、格闘技やってるだけあって力もあってすご〜く強いけど、今は僕に逆らえないただの女の人」

「はあ」

「はあ」

もつと気持ちよくしてあげるからね」

僕のおちんち○無しじゃ生きられないからさあ」

「あっ、はっ、あんっ！ ショタチ○ポすいっ！ 気持ちSSO〜」



「はあっ、あっ！君のおちんち○が奥まで当たって気持ちいい！」

「気持ちSSoo~」

「はあっ」

「はあっ」

「はあっ」

「はあっ」

「僕がお姉ちゃんの中に一番柔らかい所を突く度に、お姉ちゃんがエツちな声あげて涙ぐむのかわいいよ」

「。。。はあはあ、ももめちゃんちゃんだったから」



「はあっ、あっ！君のおちんち○が奥まで当たって気持ちいい！
気持ちSSS〜」

はあっ♡

はあっ♡

はあっ♡

はあっ♡

「僕がお姉ちゃんの中に一番柔らかい所を突く度に、
お姉ちゃんがエツチな声あげて涙ぐむのかわいい♪」

。。。はあはあ、もつとめちゃうちゃにしたい〜」

このコに何度も奥まで突かれる度に、シヨタとは言えどやはり女は男には勝てないと感じる。
。。。だってこんな小さなコに何回も何度もイカされるんだもん♪





「お姉ちゃん出すねー！」

ジュン♡

ジュン♡

お姉ちゃんの中はらのはら出てくるー！

ジュン♡

ジュン♡

ジュン
ジュン

ジュン♡

ジュン♡

ジュン♡